

知識探訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

サラワク州の農山村の行方

市川昌広（高知大学地域協働学部教授）

私がマレーシア・サラワク州のイバン人の村に住み込みで調査を始めたのは、かれこれ30年近く前のことになる。当時は、大学院の学生だった。村では多くの住民が山の斜面の焼き畑や湿地で米を作っていた。米の収穫は2月ごろから1か月間ほど連日行われていた。炎天下、早朝から日暮れまでの厳しい作業で、村に入ったばかりの私はそれに付き合っていた。

作業の合間に「この田んぼでの稲作は子どもが継ぐのか」と聞いてみた。私が住んでいた世帯には50歳前後の夫婦がいて、彼らには小学生の子どもがいた。当時、研究を始めて間もない私は文献から得た知識から、イバン人にとって稲作は生活の糧を得るためにも、精神的にも、大切な生業だと考えていた。

答えは当然、子どもが稲作を継ぐということだと予想していた。ところが彼らの返事は、「こんな泥まみれになって、もうかりもしない仕事を誰がするか。子どもには冷房の効いた事務所での仕事をさせたい」というものであった。

日本において私が村をしばしば訪れるようになったのは、高知県に来てからなので、ここ10年余りのことである。過疎・高齢化が進む高知県の山村で、高齢の村人からサラワク州の話と似たようなことを聞いた。

都会に出た50歳ほどの息子が会社を辞めて帰ってきたいと言っているという。親の面倒を見たいし、昔なつかしい故郷で田畑を作りながら暮らしたいらしい。その高齢の親は、息子に対して、「定年になるまでは会社に勤める。ここに戻っても仕事がない。年金がもらえるようになったら帰って来い」と言ったそうだ。息子は長男だったが、小中学校の頃から、ここにいても生活は苦しいと言いつけてきたのだとか。



成人した子ども（左端）がサラワク州ミリの市街地に購入した住居にて。右端が筆者で、その隣が子どもの母親。（筆者提供）

3年前にサラワク州の村を再び訪ねると、かつて話を聞いた夫婦や彼らの子どもはいなかった。子どもは結婚して同州の都市ミリの市街地に家を買って、すでに夫を亡くした妻は子ども家族とそこで同居していた。立派に成人した子どもは、冷房の効いた事務所まで仕事をしている。

一方、村の方では稲作を行う世帯は皆無になっていた。米はミリのスーパーマーケットで輸入米を買う方が安いからだ。村はミリから自動車まで30分ほどと近いので、村に残った多くの若者が自動車を買って、ミリへの通勤に使っている。

サラワク州でも、ミリから離れた村々では事情は異なる。自動車で伐採道路を使って3、4時間以上かかる所では、全体の半数以上、多ければ7割が空き家となっている村がぼつりぼつりと見られる。たいてい世帯を挙げてミリやその他の都市へ引っ越したのだ。残っている多くが高齢者だ。稲作は小さくなり、やめてしまった村もある。

サラワク州の農村は今後どうなっていくのだろうか。日本のように都市近郊ではある程度の人口が維持されつつ農業がほそぼそと行われ、都市から離れた所では過疎・高齢化がさらに進むのだろうか。

高知県の山村では、その生活基盤、社会や文化を維持し、再興しようと日々努力している人々が数は多くはないが、その動きを応援する都会暮らしの人々もいる。そういう人をサラワクでも時々見掛ける。例えば、私の知人は山の産物を都市に運んで売ったり、村に宿泊施設を建てて都市からの観光客を呼び込もうとしたりしている。自らが生まれ育った場所を興そうとしているのだ。

今後、地球的規模で農山村は過疎・高齢化の大きな流れの中に巻き込まれていくのかもしれない。その流れにあらがう動きにくみしていくのが今後の私の研究となろう。

< 筆者紹介 >

1962年、千葉県生まれ。京都大学人間・環境学研究所博士課程修了。総合地球環境学研究所を経て、高知大学へ。サラワク州における研究とともに、近年では高知県大豊町の山村で実践型地域研究を行っている。